

100Ys NEWS

No. 180
NPO法人教育再生地方議員百人と市民の会
理事長 大阪府議会議員 辻 淳子
【発行・編集責任者】
事務局長 増木重夫
大阪府吹田市古江台
2-10-13
TEL 090-3710-4815
FAX 06-6835-0974
<http://www1.ocn.ne.jp/~h100prs/>

「沖縄県平和記念資料館」

その真実

元鎌倉市議 伊藤玲子

<http://ndp.parfa.jp/suser/h23/1-5-otawa/kojin>

「こじばらく、鎌倉の伊藤玲子先生が静かだ。体調を心配していた。半年ほど前に「沖縄がああだこうだ……気に入らないわよ！ 月に2回は沖縄通いヨ」などと電話で話したのが最後だ。」

そうしたら何のことはない。「できたわよ。」と事務局に電話がかかってきた。

「何ができたんですか。」

「沖縄の平和資料館をきっちりまとめたから。とんでもないのよ！」

そして先生から本が送られてきた。十数回沖縄取材にいかれたという。

私たちが先生に始めてお目にかかったのが十数年前。そのときは70歳を過ぎていたように思う。「まえがき」を読ませていただくと83歳。もうそのへいだったろう。

「沖縄県平和記念資料館」その真実

「まえがき」より

私は、今でも昭和十八年十月二十一日の、あの学徒出陣壮行会を思い出すたびに胸がつかまり涙がこみ上げてくる。昭和十八年四月、プーゲンビル島方面における山本五十六連合艦隊司令長官の戦死、同年五月アッツ島守備隊の玉砕等々、戦局はますます厳しく、毎日が悲壮な思いであった。いよいよ最後の学生さんに召集がかかった。神宮外苑の広場は折からの雨の降りしきる中、学生服から軍服に着替えてゲートルを巻き銃を一肩に雄々しい姿の学徒を十万人がお見送りの。私は当時、女学校五年生だった。「武運長久をお祈りいたします」「銃後は私たちがしっかり守ります」と学徒のご無事を祈り、心に決意した。しかし、学徒の三分の二は戦場に散華されたのであった。

この尊い犠牲の上に今日のあることを忘れてはならない。

昨年の秋平成二十一年十月、講演のために沖縄を訪れ、一泊して戦跡を巡らさせていただいた。その主催者に伝えていた。

大田中将の決別の電文「有名な海軍壕司令部（豊見城市）や陸軍第一外科病院壕跡（南風原町）などを案内して頂いた後、沖縄県平和記念資料館を拝観した。その時、私は驚きと悲しみと、表現しようのない怒りと申し訳ない思いに、このままいいの……やりきれない思いが込み上げてきた。「一階の展示はどれも、「日本軍悪し、日本軍悪し」の前提で展示されているのである。折柄、中学生、高校生の修学旅行生が大勢、来館していた。将来の日本を担っていく子供たちが、この展示を見て日本をどう思うのだろうか。この展示からは、郷土愛も、日本人としての誇りも、愛国心も生まれはしないだろう。何故なら、この資料館には、沖縄県民が旧日本軍と共に郷土と祖国のために如何に戦ったかという視点は、何処にも無いからだ。はたして、この展示は、検証を充分に行った上での内容になっているのだろうか」と強い疑念が湧いた。

この資料館は新築移転されてから十年を迎えるという。来館者は昨年十一月に四百万人に達したという。この間、この状態を放置してきたのは何故なのか。誰も正そうとしなかったのか。私は日本人として悲しくなった。いわゆる「南京大虐殺」「従軍慰安婦強制連行」、そして「沖縄県平和記念資料館」。何処まで日本を庇めるつもりなのだろうか。

この資料館の偏向を札ず人がいないのであれば私がやる。八十三歳になる私だが、人生最後の仕事として取り組もう。それは、私は「日本が大切だ」「日本を失いたくない」「日本を失ってはならない」と思うからである。

私がそのように決意するのを知っていたかのよう。私が幹事長を務める「建て直そう日本・女性塾」の沖縄県支部が間もなく結成され、沖縄戦に詳しい作家や郷土史研究者、沖縄戦の証言者が瞬く間に協力を表明して下さった。翌月から沖縄通いが始まった。資料を集め、証言者に会い、協力者らと検証作業を繰り返した。この調査によってこれまで語られてきた沖縄戦には、恣意的な誤りがあることが明らかとなった。また、沖縄戦を記録した体験談集や出版物には、編集者による改ざんや偏向した編集がなされていることも

突き止めた。沖縄県平和記念資料館の展示では、手法に巧みな印象操作が施されていることも、館内にある証言はその内容が事実であるかどうか検証されないままの公開がなされていることも明らかとなった。「この沖縄県平和記念資料館の展示のコンセプトは「住民の目で捉えた沖縄戦」であるという。ところが私の感想からいえば、この展示内容は現在ではデマゴーグとまで酷評される沖縄タイムス社編『鉄の暴風』そのものである。

当時米軍が行った爆撃は、日本軍と一般住民を区別しない無差別爆撃であったし、避難民を承知での機銃掃射もしばしば行われたことも、この資料館では批判の対象となっていない。住民を守りながら、食糧を提供し、米軍に対し圧倒的な劣勢にありながらも、一体となって勇戦した兵士と民間志願者、さらには本土から数時間を要して航空特攻に散華された青年たちも、この沖縄県平和記念資料館の展示には、加えられていない。むしろ戦傷病者戦没者遺族支援法の一般住民への適応をめぐる「追いつけ」「スパイ容疑での虐殺」「集団白旗の軍命」が強調される展示となっている。このような検証結果をまとめた本書は、沖縄に散華された英霊の叫びであろうと思う。

私が提示した各項目の疑義を讀者に精査して頂き、これまで左翼運動家等の独壇場だった「沖縄戦史」に光明を当て、覆わされていた怨念の闇

を去らせる運動を喚起頂ければ幸いです。出版までの間、協力頂いた皆様にご心より感謝を申し上げます。また、多忙な仕事の合間をぬって編集に協力頂いた豊田剛氏と錦古里正一氏、制約され期限を校正と出版に尽力頂いた展転社の藤本隆之氏に心より感謝を申し上げます。平成二十二年八月吉日

推薦の辞「日教組教育のくびきを断つ脱洗脳」の書

新しい歴史教科書をつくる会会長 藤岡信勝

「日本の兵隊が銃剣で脅して、沖縄の住民を壕から追い出した、という話は全く間違いです。日本兵は、上陸した米軍が迫って来るなか、住民を助けるために、最も危険な壕を出るよう誘導しようとしたのです。照屋昇雄さんは、米軍上陸時の戦場の地形や戦線配置の構図を身振り手振りで説明し始めた。それは私にとって驚くべき内容で、あたかも脳天を一撃されたかのような体験だった。なにしろ、私は、その瞬間まで、「日本兵が非情にも壕に避難している住民を追い出して、弾雨のなかで曝した」という話を信じ込んでいたからである。

時折、忘れもしない平成十七年五月二十一日。場所は照屋さんご自宅。訪問の目的は、教科書にも書かれていた「沖縄戦集団自決軍命令説」を検証するため、集団自決の遺族の補償問題に琉球政府の職員として関わった照屋さんにお話を伺うことだった。そのインタビューの中で、照屋さんは、たまたま右の話をされたのである。

戦場の極限状況のなかで、沖縄住民の命を守ろうとした日本兵の行動が、その正反対のつくり話となつて伝えられている。あたかも日本兵は、自分たちの命のために、現地の住民を犠牲にした悪逆非道な人々であったとされている。「悔しい」とつぶやいた照屋さんの目には涙が光っていた。照屋証言は、私にとって、「沖縄戦の真実」に到達するための導きの糸となった。

その後、私は集団自決について、何度も現地入りし、照屋さんのような「沖縄の良心」といふべき新たな証言者にも出会った。ところが、沖縄県平和記念資料館には、銃剣を突き立てて壕から住民を追い出そうとする日本兵の蟬人形が展示されているではないか。その面相は、いかにも毒々しい悪人づらである。これを本土から修学旅行で来た多数の中学生・高校生が見て

「日本軍＝悪逆非道」のイメージが脳裏に刻み込まれる。これは何とかしなければならぬ、と思いつつ、長い時間が経ってしまった。その課題を見事になしとけて下さったのが、本書の著者・伊藤玲子さんである。

伊藤さんは鎌倉市議を四期十六年つとめ、在任中も退任後も、戦後日本人の精神を歪めた日教組教育と一貫して闘ってこられた。その情熱と行動力には、誰しも脱帽し、敬服している。個人的にも十数年にわたりおつきあいさせていただいているが、その行動力、実行力に驚嘆することがしばしばだった。

一例をあげると、私は平成十年（一九九八年）、南洋の親日国であるパラオ共和国をたずねた。夕方、浜辺で聞かれた独立記念日の式典に参加した際、会場の人混みの中であたりと伊藤さんに出会った。パラオ体験は私にとっても強烈で、私は自著の中でパラオの教科書や文部大臣とのインタビューを書いた。ところが、伊藤さんの関わり方は私の想像を超えたものだった。伊藤さんは、パラオの文部大臣から日本の修身教科書をもとにした道徳の教材を作成することを依頼され、立派な冊子にまとめて英訳し、パラオに送り届けたのである。

その伊藤さんが、一年がかりで取り組んでまとめたのが本書である。「沖縄戦の真実」にめざめ、沖縄県平和記念資料館の展示に立腹し、「なんとかしなければ」という思いを持った人は、私だけでなく沢山いたはずである。

しかし、それを実際に行動に移したのは、伊藤さんが初めてである。「思いつく」「実行する」とこととの間には天地の懸隔がある。伊藤さんは、毎月二回鎌倉から沖縄に通い詰め、錦古里正一さんなど現地の人々の協力も得て、このような著書をまとめた。

ただただ敬服し、感謝の思いでいっぱいである。今、沖縄県の一部である尖閣諸島を、不当にも自国の領土であると宣言した中国が強奪しようとしている。尖閣の次は沖縄本島を取りに来る。日本は国家的な危機を迎えている。沖縄はこれからますます日本の政治・外交の焦点となつてくるだろう。そうした中で、国を売り渡すかのような日本の政治家の行動は、もとをたどれば戦前の日本を残酷な侵略国家として描き出した日教組流の「自虐史観」教育で洗脳されたためである。その教育の具体的で強力な教材となつてきた戦争展示の嘘を明らかにした本書は、日教組教育のくびきを断つ「脱洗脳」の書といふべきである。誠に時宜を得たものであり、多くの方々に勧めたい。

平成二十二年九月吉日

【問い合わせ先】

03-3815-0721 展転社

